翻　刻

みくるまのあと（小出粲著）

解題

小出粲（つばら）著。皇后宮職蔵版。明治二十四年（一八九二）二月刊。活字本一冊。縦二三・〇糎×横一五・二糎。袋綴線装本（四ッ目綴）。匡郭なし。全七八丁。明治二十三年（一八九一）四月から五月にかけて行なわれた、明治天皇・昭憲皇太后の京都・奈良・兵庫行幸啓の様子を、これに供奉した御歌所勤務・宮内属の小出粲が記録した紀行文である。跋文によれば、本書はもともと小出粲の日記であったらしく、それを昭憲皇太后の「おほせごと」によって刊行に至ったことが知られる。この行幸啓は、明治二十二年十月に東京・京都間鉄道が開通したのを承けて行幸啓の計画があったものの、国事多端のため果たすことができなかった。そこで愛知県で陸海軍聯合大演習が行なわれるのを契機として計画されたのである（『明治天皇紀』第七・明治二十三年四月四日条）。

本書は、明治天皇の御製、昭憲皇太后の御歌をはじめ、小出粲の歌はもちろん、御歌所長の高崎正風、女官の税所敦子・柳原愛子らの歌も織り交ぜながら書かれている。したがって、明治期の和歌文学としての価値を有していることは言うまでもないが、何よりも行幸啓の様子が大変詳しく記述されており、その方面の資料としても高い価値を有していよう。表題については、跋文にその由来が記されている。それによると、高崎正風の意見により、和歌の文句から採られた。その和歌は、「春の夢のこてふはいでましの花みくるまのあとやおふらん」というもので、この「歌のをかしくおぼえしかば、こゝろのひ」いたため「みくるまのあと」と名づけたとある。この歌は、本書にも出てくる高崎正風の歌である。

著者小出粲は浜田藩士で、天保四年（一八三三）八月二十六日、江戸南八丁堀浜田藩別邸で生まれた。最初絵画を学んでいたが三年ほどで止め、藩学官諭社に入る。歌道を志したのは十五・六歳のとき。のち島原藩の瀬戸久敬に学んだ。明治八年（一八七五）に太政官十三等出仕となり、十年（一八七七）宮内省文学御用掛、二十一年（一八八八）御歌所勤務、二十五年（一八九二）御歌所寄人、三十三年（一九〇一）御歌所主事心得を歴任した。明治四十一年（一九〇八）四月十五日、七十六歳にて没す。著書に『くちなしの花』『梔花拾遺』『小出粲翁家集』『幾久能志太幡』『飛騨の山ふみ』『麻衣』などがある（『明治維新人名辞典』）。なお宮本誉士『御歌所と国学者』（弘文堂、平成二十二年）には、御歌所歌人としての粲が論じられている。粲の詳しい事績については、同書を参照いただきたい。

凡例

一、明治神宮文庫所蔵本（I-2／5464／C）を底本とした。

一、基本的に底本の形態を尊重する方針とし、改行箇所・仮名遣い・踊り字の類はほぼ底本のままであるが、漢字・変体仮名等は、原則として通行の字体に改めた。例えば、「京」→「京」、「うち〳〵にハ」→「うち〳〵には」の類である。

一、底本には、句読点・濁点等の類が一切附されていない。平仮名の使用が多く、そのままでは読みづらいため、翻刻者の判断により、適宜句読点・濁点等を追加した。

一、判読不能な文字は■とした。

一、誤植は、底本の裏表紙見返しに附された正誤表によって適宜改めた。ただし正誤表にはなく、誤植と思われる箇所は、傍らに「ママ」とした。

（戸浪裕之）

こたびきさいの宮、京都へ行啓のおほせごとあり。うち〳〵には、あをによし奈良をへて初瀬・吉野の山々の花をも見給ひ、おしてるなにはを過て、須磨の浦・舞子の濱の月をも見給はんとてなん、おのれをもみとものの数につかへまつるべく、おほせくださる。おのかきはには、またためしなきことにて、いと〳〵かたじけなし。そも〳〵あきのみやまのふかきみこころは、ふもとのちりのかずならぬみのうかゞひはかるべきにあらねど、つねのおほんこゝろおきてをうかゞひ奉れば、こたびうへには、おほんみづから陸海の御軍をひきゐ給ひて、大演習といふことせさせ給ふとて、尾張・三河へいでま」（一丁表）し、かしこくも風に梳り、雨に浴したまふらん、おほんいたつきをひとり九重のうちにきゝて、やすいし給はんことのみこゝろやすからずおもほして、せめてはおなじ旅にたゝせたまひて、近くおほんありさまをもうかゞひ、おほみこゝろをもなぐさめ奉り、かつはいたつきをともにし給はんのみこゝろにや、おはしますらん。されど、つねにさかしたちたるおほんふるまひなどは、いとつゝましうせさせ給ふ御本性におはしませば、わざとうはべは、月花にことよせて、かゝるお■したちもおはしますなめりかし。

四月二日、雨ふる。けふ行啓の御先発にて、緋桜の権のすけ、樗」（一丁裏）のないじ、若葉の権のないし、菅の命婦、薫の命婦はいでたつ。

三日、天気よし。あすは京都へたゝせ給ふとて、宮のうちもいとにきはゝし。をりふしまたいた寒きはるのあらしに、みそのゝはなのゝこりなくちるをみて、楓のないじ、

　みまさすはにほはんかひもあらじとやみその、花のまたきちるらん、と啓し奉りしに、

　ちる花のこずゑはおきてはる寒き風をぞいとふ老人のため、とおほんかへし給はりけるよし、そのときの老人のこゝろ、いろいろなりけんかし。たぐひなきおほんいつく」（二丁表）しみのほどは、まうすもおろかにて、おほん歌からさへ、いと〳〵なつかしう、つたへうけ給はるよそのそでさへ、そゞろにぬれ侍りぬ。四日、天気ことにうるはし。かねてみさだめの如く、今朝七時にみかどいでさせ給ふ。みくるまのうちには、新樹のすけ、つかうまつるみともには、香川皇后宮大夫、岩佐侍医、山内宮内書記、鮫島陸軍の中佐、石原陸軍の大尉、池原・中村・赤松の三陸軍の中尉をはじめ、宮内職寮局の属、そこばくつかうまつる。女房には、早蕨の権のすけ、柳・北島の両権のないじ、楸の命婦、梢の権の命婦をはじめ、女孺・雑仕そこばくしたがひ奉る」（二丁裏）。さて出させ給へば、みあとより新橋まで、軍人ひまなくたちなみたり。停車場につき給へば、おほんおくりには、皇太子をはじめ奉り、みこたち、おとゞたち、つかさ〳〵の人ども、ところせまきまでぞみえける。宮汽車にのり給はんとするに、姫みこのいとをさなきひざにおはするが、くれなゐの御衣きたまひて、なにこゝろもなくおほんするにまつはり給へば、御ぐしかきなで、つゝものゝ給はす。されど、はるかなるほどなれば、よくもきこえずとみにものり給いて、やすらはせ給へるおほんありさま、にるものなくめでたし。のり給ひても、猶まどのうちより、さしのぞかせ給ふ。をりしもひとこゑ」（三丁表）の汽笛とともに、汽車はゆるきいでぬ。高崎御歌所長きのふまゐのぼりて、かくなん啓せられしとぞ、

　みよしのゝちもとのさくらのこりなくゑみほころびてきみにまつらん

　いにしへの雲ゐのさくらみそなはすみけしのそでに露やちるらん

このはるのゆめのこてふはいでましのはなみくるまのあとやおふらん、また早蕨のすけにとて、

みよしのゝよしのゝはるをことのはのはなにうつしていへつにせよ、これを今柳のないじのきゝつけて。ねたがりつゝ、

きくかひもあらじとおもひてうぐひすのはれにはこゑをゝしむなるらん、とよみて、御歌所長へみせければ、例のとわらひながら、とりあへず名刺のうらに鉛筆もてかいていだされたる。

うぐひすもなかずなりけんことのはの花のにほひにこゝろおくれて、あわたゞしきなかにも、かゝるかたのみやびはすくさぬぞ、いとをかしき。又楓のないじ、

とほざかるほどぞかなしきおもふともみよもにたつはうれしけれども、といへるかへし、柳のないじ」（四丁表）

うきことをしらぬたびじにかなしきは君をのこしていつるなりけり、とぞありし。おのれにとて、御歌所長より、

みともだにうらやましききみがゆくたびはよそのの花みなりけり、といひおこせられければ、

うれしくもよしのゝたびのかどいでにきみがことばの花をみるかな、と思ふもこゝろのうちなり、また毛利侯爵よりかくなん、

うらやましみともつかへてよしの山はなのさかりをみてきます君、などありしかど、かへしするいとまもなし。かかるわたくしのすぢも、いとおほかりつれど、さのみはとて」（四丁裏）とゞめつ。けふはこのごろにまれなる日和にて、海のおもてもかすみわたりて、いとのどかにこゝちよし。わだつみの神もいでましをよろこび給ふにやあらん。かくてゆくまゝに、山にもさとにも、ちり残れる花の木末の、をちこちにに見わたされ、はたけには菜の花のさきつゞきたるめなれたる、おのがとちにも、いとをかしきをまして、をすのうちにのみおはします。おほんめうつくしには、いかにめづらしうも御覧せらるらんかし。さとごとに、学校の生徒のうち、つどひてみくるま迎へ奉るさま、処にしたがひて、なりかたちもきざみ〳〵ありて、いとをかし。をとこは軍人のいでたちし、女ははかま」（五丁表）きて、唱歌などうたひたり。新樹のすけ、

くにまもるみちをまなべるうなゐごのすゑたものしくみえたるかな、又、さとごとに、ときは木もてかどかざりしくれなゐの提灯かゝげ、日のみ旗をたて、はな火をうちあげなどおもひ〳〵に、今日をはれどしなしたる、いとめでたし。おなじさまなれば、おほかたはふきつ。けふのみちにて、まづいとおもしろきは箱根路なり。山北よりのぼるに隧道あまたありて、まへしりへに、谷川の早瀬落たきりて、巌にむせび、林をめぐるさま、えもいはずをかし。青淵のみどりは、あゐよりもあをく、白波のしろきは、雪よりもしろし。谷ことに鐵橋」（五丁裏）ありて、そのうへをはしるおとは、さながらなるかみの如く、隧道の口よりいづる烟い雲かとのみなんおどろかりける。たちまちに黒暗国裏に入るかとおもへば、あといふうちに、又白日世界に出るこゝちして、めのまへにうつりかはるありさま、たゞひとの世にもかくこぞと思ひあはせらる七つの隧道を過ぬれば、やゝたうけになりぬ。なか〳〵にうちひらけて、みちもたひらかなり。不二の雪は、かしたのうへにみえて、いとまばゆし。新樹のすけ、

あさ日かけ空にかゞやくふじのねの雪のひかりをなにゝたとへん、柳のないじ」（六丁表）

こゝろゆくはるのたびぢにふじのねもまばゆきまでにはれしけふ哉、をちこちの山〳〵にも、猶のこりの雪処々にあり。みゆるかぎりは、家ゐもいとまれなるを、みくるまをがむ人のこゝかしこにつどへるは、いづくよりいできけんとあやしきまでになん、

ゐなか人のみくるまをがむさまこそ、又なくをかしけれ。かしこまりも、うちわすれつゝ、あきたるくち、ふたくべきすべもなく、よたりなかし。指さしなどしたるよ、おほんまへにもいかにをかしと御覧すらんかし。学校の生徒などは、さすがにおほみ代のめぐみにもれぬさましたり。道の左のうたは、川さしのたかく岡めきたる処々よ」（六丁裏）りいとしろうおちくる滝のけしき、いとよし。御殿場にいたれば、畑などもひろく、のぎはのさくら、かきねの菜の花など、をりしりかほに春めきたり。かたぶきたるわらやのひざしに、日のみかたの旗などたてたる差に、さすがにめとまるこゝちす。これより坂道をくだり、はづれは沼津の宿なり。みくるま迎へ奉る人もいとおほくなり、かたちまで箱根山のめうつしには、いとあてはかなり。こゝを過て原より江尻までのあひだ、不二のやまのけしき、いつもおなじことなれと今日はことによし。早蕨のすけ、

まかな路のなゝめになりしほどみえてふじのすがた」（七丁表）のかはりけるかな、をりにあひていとをかし。それよりゆひ・くらさはのあたり、海のおもては、たゞ青だゝみをしきたらんやうにて、濱のしらすにしほくむ海士のこどものあきれたるかほして、みくるまあふぎみたるさま、いとをかし。静岡にてひるまのおもの奉るあがたのかみより、くだものなどまゐらす。こゝをたゝせ給ひて、阿倍川のはしにかゝる汽車のまどより、かへりみすれば、まばゆかりし不二のねの雪も、霞のおくになりて、うすくれなゐにほひたる、めのまへにみしよりも、いとなつかし。川上はるかにうちけぶりて、ひろきしらすのところ〳〵に行水の、いとしろうみゆるなと、いは」（七丁裏）んかたなし。みるがうちに、にはかにか、いくらかりしは金谷の隧道に入りたるなりけり。こゝを過れば濱松なり。みくるま迎へ奉る人々よりはじめて、よろづのさま、静岡にもおとらずみゆほどもなく、濱名湖にかゝるこのあたりのけしきこそ、東路のすぐれたるみどころにはすなれ。汽車はたゞ水のうへをはしりゆくこゝちして、あやふけにぞおぼゆる。舟人のおそるゝ遠江灘のも、けふはいとしづかに霞わたりて、空もひとつに見ゆ。荒井に近づけば、濱名のかしの上に学校の生徒のなみゐたる、いとうつくし。はしをわたりいでゝも、猶しばらくは海つらなり、山路にか、れば高き岩山のうへに、」（八丁表）仏のたてるかみゆ大岩村の窟の観世音なりとぞ。やがて豊橋にいたるところのさま、大かたは濱松にゝたり。岡崎ははるかに宿のこなたを過れば、よくもみえず。午後五時過る頃、名古屋の停車場につき給ひぬ。おほん迎へはみこたち、おとゞをはじめ、つかさ人、いとおほし。柳のないじ、

おほまへにさぶらひなれし人みればみやこにつきしこゝちこそすれ、だれもしかおぼゆらん、かしこれよりたゞちにかり宮につかせ給ふうえには、大演習のことはてさせ給ひて、きのふ今日このかり宮におはしますほどなりけり。このかり宮は東本願寺の別院なり。停車場よりはほど遠」（八丁裏）けれど、そのあひだ、わづかにみくるまの過るひとすぢの外は、きりをたつるすきまもなく、人たちこみたり。けふはうへにも御対面せさせ給ひて、御かたみにうるはしきおほんありさまを、よろこびかいし給ひ、ひごろの御ものがたりともつきせずおはすらんを、あやにくなるはるのよの、ながゝらぬこそこゝろなけれ。大演習のをり、うへのおほんありさまのかたくかしこかりしことなど、侍従たちのものがたるをきゝて、柳のないじ、

ますらをにあらぬりかみもみをすてゝつかへんとのみ思ふみよかな、とよみしは、げにことはりぞかし。かり宮の」（九丁表）東のかたの畑中にて、花火あまたうちあけたり。かゝるにぎはひ

も、やゝしづまるころ、南の風あらく吹たちて、雨さへふりいでぬ。あすのおほん旅路をおもへば、とけてもねられず。五日、猶南の風あらく、をり〳〵小雨ふるこの暁かたに、柳のないじ、

たびぢともしらでねふるぬみくるまのとまる処やみやこなるらん、とよめるは、歌からさへぞ、いとうらやましき。今日はうへの宮もろともに、午前十時二十分にこゝをたゝせ給ひて、京都にいらせ給ふべきみさだめなりければ、九時ばかりにみなかり宮にまゐりて、いでましをまち奉るに、空の」（九丁裏）けしきは、いとゝりろくなりて、風あらし、いたうふらぬほどにと、だれも〳〵もこゝろいられするに、鉄道のかみのまゐりて、よべより大演習の軍人のいでたるか、猶道にたゆたへばひるすぐるころならでは、御料の汽車いでかたしと申すさまなり。くはしきことはしらねどいとかしこし。そのすぢの人々は車をはしらして、かり宮よりあまたゝび停車場に行かふさまに、ことのいできつたんと、ことのよししらぬ人は、まゆをひそめけるもことはりなり。はや十時も過ぬれば、道のほとりにたちて、おくりし奉らんとつどひたる人々の、今や〳〵とまち奉る。ひたひ髪よりしたゝる雨のしづく」（十丁表）もいとりひけなり。さはいへ今は、ほどもあらしとおのれもまつ停車場に行てまち奉るに、猶かり宮に行かふ車とものみあはたゞしうて、さるけしきもみえず、午後一時過るころ、そこらうちそよめきて、いでましなりといふ。いとうれし。祝砲のおと、ひゞきて楽隊の楽奏するほどに、うへ宮みくるまつらねて、わたらせ給ふみけしきのうるはしきをゝかみ奉りて、人みなこゝろおちぬ。やがて御料の汽車にのらせ給ふ。そのつきに宮つき〳〵みともの人々、例の如し。一時二十分といふに、汽車ゆるきいづ。雨風猶やまず、停車場ことにさと人のみくるま迎へ奉ること、きのふの如し。車のけむり」（十丁裏）も雨にうたれて、下はふさまさながら、雲の中を行こゝちす。関が原あたりは、木立しげくて、つねたにをくらき山かけなるに、雨と煙ときりふたかりて、いりのまとも、紙をいりたるこゝちす。くるまのうちに、かねてともしたる燈のひかりのみぞ、時えがほに、かゞやきたる煙のひまより、松杉などの風にうごくさま、をり〳〵ほのかみゆる。いとものすこし米原にいたれば、うみのおもて、すこしあかるくみえそめて、いきいづるこゝちす。こゝには学校の生徒も、ことにおほくみゆ。行まゝに雨雲のたゞ水のうへにつくばかりにみゆるひまより、舟などのゆきかふさまをかし。瀬田のわたり過るほ」（十一丁表）ど、石山も雲のたえまにみえかくれして、さだかならねど、なかなかによきけしきなり。早蕨のすけ、

雨くものたちかさなりてかゞみ山かけはかりだにみえぬけふかな、とよまれしも、このわたりにことなるべし。番場にて、こはし汽車とゞまりぬ。あかたのつかさ人たちいで迎へ奉る。これより大谷の隧道にいれば、くらきよりくらき道に入るこゝちして、いとせしこれをいづれは京都もほどちかしおもひなしにや、そらのけしきも、すこしあかるくなりゆく。今までねぶりたるやうなる人々も、そゞろきたちてこわたかに、ものいふこゑ、いとたのもしげなり。まして」（十一丁裏）女房たちのいかにうれしからんとぞおもひやらるゝ。京都につかせ給へば、停車場のあたりにて、例の花火のおと、うちしきりたり。けぶりの中より、日のみ旗のあらはれいでたるは、をりからにや、こゝろもはるゝやうにおぼゆ。汽車をおりさせ給ひて、みくるまにうつらせ給ふほど、楽隊のものゝねともに、近衛のつかさ、みはたたてゝいでたつ。例のことなれど、ことにおぼゆるは処からなめり。おほん迎えには、みこたちはじめ、つかさ人たちつかうまつりたり。道の左右に堤をつきたらんやうに、学校の生徒、かんづかさ、法師など、あまた

の人々、停車場より堺町のみかどまでなみゐたり。御所」（十二丁表）近き処には、華族たち、またふるき女房などのみしれるものあり、御所につかせ給ひしは、午後六時三十分なりき。御所のうち、なにとなき板しきまでも、むかしなつかしうおぼゆるを、ましてはやくすみなれし女房たちなどは、こといみもしあへずかし。たひらかに着せ給へるよろこび申して、皆おのからしゝのやどりにつきぬ。おのがやとりは、宮の大夫をはじめ、あて人もおのかづらも、いとおほくてよろづたのもし。くれかたより、雲はれわたり、空にもよろこびのけしきあらはれて、めづらしく月のかほさへみゆ。

六日空はれて、いとこゝちよし。きのふかゝらましかばと思」（十二丁裏）ふも、かひなし。みはしのたち花をみて、新樹のすけ、

こゝのへのみはしのもとのたちばなはむかしのまゝのかにほひつゝ、たゞごとのやうなれど、をりにあひたるまごゝろは、いつもあはれにおぼゆるぞかし。おのれは、朝とく久邇宮にまゐりて、御歌所長より、あつらへられたる伊勢神宮の献詠の歌ともたてまつり、それよりうちにまゐることなければ、ひるごろまかでぬ。けふはすこしいとまあれば、日記などもかゝんとおもふほどに、したしき人どものつどひきて、さだかにめづらしければ、ゆふつかたまでかたらひぬ。また空のけしきわろくなりて、風あらゝかに、ひとむらさ」（十三丁表）めのゆふたちめきて、あれたゝしうふりいでぬ。はれて後に人のいひけるは、あられなどもまじれりとか。ゆうつかたよりは、又はれて月いとよし。よるの花もゆかしけれど、風のここちにたれこめて、ともしびのもとによを更しつ。

七日ひかげさしながら、うき雲まよひて朝風寒く、をり〳〵小雨ふる。さだめなき雲の行来は、時雨の空にゝたりかくては、花もの こりなくちりはてんと思ふに、いとくちをしうちにまゐる道にて、北山をみれば、むら〳〵しろし。よべのあられは雪なりけりと、今朝ぞ思ひしらるゝ。今日はひるごろよりまかでゝ、華族の歌の会に桂宮にゆく。会長のみや」（十三丁裏）もわたらせ給ひぬ。当座の題は、こたび華族にたまひたる都春月前興といふことを、おの〳〵よみて奉る。おのれはやく此会のためにおほせごとうけ給はりて、京都にありしちなみにより、今日もこのむしろの末につらなるなりけり。ゆふつかたやどりにかへる明日は、泉湧寺・東福寺へ行啓のおほせごとあり。

八日、天気よし。北山より東山にかけて霞にたれるけしき、ことわりの春の空ながら、こと処にいこよなくこそおぼゆれ。午前九時三十分より、うへ宮みくるまをつらねて、泉湧寺へいでます。みとも例の如し。けふは空のけしきも、ことにうるは」（十四丁表）しういでましをかみ奉らんとて、御苑内より道のほとりになみゐたる人々のけしきも、ことにこゝちよけなり。堺町のみかどより三條を寺町通り、五條を大和大路にをれて、泉湧寺にいらせ給ひぬ処のさまは、だれもよくしれゝばかゝず。されど今日のみひかりには、処ともおぼえず。木草の色までうれしげにみゆるも、をりからなるべし。つかせ給へば、まつりのつかさ、よろづゝかうまつりて、うへ宮つき〳〵にをかませ給ふおほんありさま、ことわりなからいとめてたうかたじけなし。はてぬれば、もとのおましにつかせ給ひうへには、かへられ給ふ宮は御おくりし給ひて、すこしおく」（十四丁裏）れて東福寺へわたらせ給ふ。これは御さとかたの世々のみはか処なれば、まゐらせ給ふなりけり。かの通天橋のもとより、御板輿にめしかへていらせ給ふ。今日のおまし処のつまやの板しきに、みこしかきあげておりさせ給ふ。おまし処にて御茶・くだもの奉る。こゝより少し東さまのたかき岡に、故殿

をはじめ奉り、世々のみ墓あり。坂道なれば、宮もあゆませ給ひ、皆かちにてみともつかうまつる。かゝるたぐひなきみ光を故殿の苔の下にみ給ふらん。いかばかりならんかし。ささいのみやのみさかえは、昔ものがたりなどにも、いみじきものにいひなしたれど、かくひらけ行、今のおほみよにこち」（十五丁表）ならひ給ひて、外国までもうやまひあふぎ奉りて、いやさかえにさかえさせ給ふこのおほん光にくらべては、ものにもあらぬなるべし。さてもとのおましにかへらせ給へば、ひるのおもの奉り、この寺の宝物、ふるきゑなど、御覧せさす。おのれもひとりたり。みつれどおぼろげなるはなかりけり。東福寺へ金そこばくをたまふ。これよりかへさに内山にたちよらせ給ふ。東のかたの山にて、月輪関白のみはかどころなり。おなじすじの遠つみおやにおいしまして、近き頃、九条殿、大谷法主にいひあいせて、なごりの木立きりはらひ、あらたに御堂・拝殿などつくらせ、いとめでたくしなし給へれば、今日」（十五丁裏）のついでにいらせ給ふなりけり。総門よりうちの道の右左に、八重桜の今をさかりと咲にほひたる、けふのためにまうけたるこゝちす。両大谷の法主たち、みさきにたちて案内し奉る御廟は、興福寺の南円堂のかたにつくらせ給へり。そのうちに関白の御像すゑ奉る。かしこければ、よくもみたてまつらねど、としふりたるさま、たふとし。御堂の北のかたには、ふかき谷にて、つゝらをりをはるかにくだれば、滝あり。ねざめの滝となんいふたきのさま、いとをかし。ほそきながれは、谷をめぐりて帯の如し。すなはち通天の谷川の水上なり。夏秋のころなどは、ましていかならん。この東北なる山は、やがて」（十六丁表）泉湧寺・月輪御陵なり。かさなりたる山のすがた、松の木立のさまなど、うき世のほかのこゝちして、水のおとも、そゞろ寒きまでなんおぼえける。

花に酔ふはるのねぶりもさめにけり月の輪山のたきのひゞきに、などおもふほどに、宮たゝせ給へば、みあとにつきてたちいつかへさは、三條まではもとの道をわたらせ給ひ、それより烏丸を北へをれて、夷川をにしに盲唖院へたちよらせ給ふ。例のおほんいつくしみふかき御本性にて、かゝるかたはことにおほんかへりみふかきなるべし。生徒のぬひものをば、しめよろづのわざをみ給ひて、なにごとをか仰」（十六丁裏）くださるゝならん。宮大夫のたび〳〵御前にまゐりて、又生徒のかたに行かふさま、いとかたじけなし。みなかたいのものにて、いづれあはれならざるはあらねど、かくまぢかくわたらせ給ふ。み光をやみのうつゝにかゝひ奉るめしひこを、又なくかなしきものはあれ、又み奉りながら、うれしともかたじけなしともいはれぬ。おしのみはなか〳〵にみ奉らさらましかばともおもふらんかし。北垣府知事もまゐりて、よろづゝかうまつる。こゝにも、金そこばくをたまふ。そのゝちかたはならぬを、みなこの琴などつかうまつるこのもののねに、すこしこゝちなほりて、おのれもゝのゝかげにきゝ」（十七丁表）ゐたり。しらべをはれば、これにも禄たまひてたゝせ給ふ。御所にかへらせ給へるは、三時過ぎなり。今日は、このごろまれなるよき天気にて、みともの人々もみなうれしと思ひたり。おくりし奉りてまかでぬ。明日は又、疎水の通水式とかにて、うへ宮ともに滋賀にいでますべきよし、仰いださる。今宵は村雲たゞよひながら空しづかにして、をり〳〵月のかげみゆ。

九日、天気ことによし。けふは通水式御覧すとて、うへには午前十時より先滋賀県庁にみゆきあり。宮はひるのおもの奉りて、十二時にいでたゝせ給ふみとも、例の如し。たゞちに大」（十七丁裏）津の三保崎といふ処にいらせ給ふ、こゝは疎水のみなもとにて、舟たまりの川口なり。よもに川をめぐらして、島のやうなる処に、白き

いさこしきて、かりそめのおましところに、よしすのやねなどして、めぐりにいたゝとはりし、ひきわたしたるのみなれば、浦風に吹あげられておまし処もあらはに見えて、いとかしこし。されど、たまのうてなのみなれ給へるおほん身には、かうさまにつくれるもなか〳〵にやうかはりてをかしと御覧すらんかし。うちわたす川むかひの白洲にて、花火うちあぐ。水の上にたゞよひ行煙のきえはつるまで、はる」（十八丁表）くとみわたされて、いと興あり。うみのおもては霞わたりて、かもめなどの飛かふさま、いとおもしろし。西のかたは三井寺・高観音めのまへにみゆ。ちりのこる花のもえ出たる若葉にまじれるか、おしなべたるよりもなか〳〵みどころあり。しばしこゝにやすらひ給ひて、御茶・くだものなど奉り、御かへさには、かねて京都・滋賀の人々のねがひ申すによりて、隧道の川すじをみ舟の行幸もあるべきよしなるに、こゝろなるものはいと〳〵かしこきことなりと、うち〳〵あやぶみ奉るものも、あまたありけり。うえにいたみの心ざしをすてさせ給はぬおほみこゝろにませば、み舟たてまつるべ」（十八丁裏）く沙汰し侍りしかど、にはかに小松のみやに御かはりをとおほせられて、みともには侍従をそへさせ給ひぬ。おとゞたちものらせ給ひぬ。あはれ民のこゝろざしをもむなしうし給ひず、又こゝろあるものゝうれへ申すをもきこしめし給ふは、まことによろしきをえたるおほんはからひなりとて、だれも〳〵ありがたきことによろこびあへりとなん。さてうへ宮もろともにこゝをたゝせ給ひ、川口のゐせきのあたり、はしのもとにみくるまとゞめて、隧道のうちのさまなど、しばしみそなはし、それより蹴上にわたらせたまふこゝろも、舟たまりてうつくしくよそほひなしたる舟ともあまた」（十九丁表）みゆ。こゝのおましも三保崎とおなじさまのまうけなり。これは山のさきにて、こたびあらたにひらきたる疎水のながれめの前にみえて、気色いとよし。みくるま拝まんとてつどへる人ども、谷のくま〳〵までみち〳〵て、人なみをぞうちたりける。しばらくこゝにいこはせ給ひて、それより粟田をへて、たゞちに鴨川の東なる今日の式場にわたらせ給ふ。おましよりはじめてそのさまめづらかに、このは草の花など、いくらともなくあつめかざりなせり。こゝも舟たまりのさま、三保崎にゝたり。中島に式場をまうけあり。川には舟ともあまたうかべり。くがには今日をはれといでたちたる京」（十九丁裏）ゐなかの男女・学校の生徒など、ひまもなくたちみちたり。京中の家には、留守する人もあらじとおもはる。しばしいこはせ給ひて、府知事の案内にて式場にのぞませ給ふ。まづ知事の祝文などありかし。こきみことのりもありしかど、よくもえうけ給はらず、そも〳〵この疎水のことは、府知事のはやくより力をつくされて、明治十八年の起業式のときは、おのれも京都にありて、そのひしも雨ふりて、都をとめのぬれそほちて、さまよひありき。しごとなど、たゝきのふのゆめのここちするをかぞふれば、はやいつたびの春秋をなんへにける。今日はひきかへて空もはれやかなるに、行幸・行啓さへう」（二十丁表）ちあひて、いと〳〵めでたし。さて年ごろの工事の艱難いかなりけん。山をうがつこと、そこむく巌をきり、林をひらくことかずしらず。そのあいだにかげ樋あり。ふせ樋あり。舟の水をはなれてくがを行くかな。路あり。さま〴〵なるたくみ、まことにめをおどろかす。されどこはは皆人のめにみゆなるを、世の人の心はめにこそ見えね、いとさかしき道なりけんを、ひたぶるにふみひらきて、つひにことしの今日の今にいたりて、知事の心ざしのとほりけることは、山々をゑりぬくよりもかたかりけんかし。いひもて行けば、なに事もおほみよのおほみめぐみによれるなりけり。さてことをはりて、午後」（二十丁裏）四時過る比、うへ宮

ともにかへらせ給ふ。おくりし奉りて、まかれてぬれば、ながき春の日も、やゝくれかたに成ぬ。かすみわたりたる御苑のうちのけしき、いはんかたなし。いでましてよりけふはかりの日はあらざりけり。今宵は都人のもよほしにて、祇園座にてまひ姫の都をどりをみすとて、おのれもよばれたれば、ゆきつみ・こだちをはじめ、おとゞたちやことなき人々もおほく、宮の女房などもみえき。これはたび〳〵みなれたることなれど、今宵はことに用意して。なき手をつくしていと興あり。もてなしもねもごろなりしかど、人おほくてさしもひろき座なれども、うしろにあるは、たゞものゝ」（二十一丁表）ねのみ聞えたりしなるべし。おのれはとくこゝにいでゝ、月のいとよければ、しばしありきて、やどりにかへりしは十時ごろなり。おなじやどりの人々もみなかへりあひぬ。十日。あくる空、いとのどかなり。この比風のこゝちにてありしを、よべより、すこしよろしきに、空のけしきもうちあひて、いとうれし。けふ九時過より、博覧会へわたらせ給ふ。みとも例の如し。かねて京都赤十字社の人々も、こゝにあつまりて、迎へ奉る府知事より、ことのよしを啓し奉れば、宮にもみけしきうるはしく、おほせごとなど、小松の宮して社員につたへさせ給ふ。人々のよろこび、おもひやるべし。しばらくいこ」（二十一丁裏）はせ給ひて、博覧会場へわたらせ給ひ、くさ〴〵のもの御覧す。おのれもみあとにつきてみつゝ行に、ことしは処のさまものゝすゑやうなど、その道々の人のおのかしゝこゝろつくしたるも、しるくおなじものもはえあり。ことにおりもの・ぬひもののすゑものなど、すぐれてみゆ。いづれも、みち〳〵のたくみのこゝろをつくせる、いみじうからぬはあらねど、たゞものごとにうるはしくはなやかに、こまやかなるかたにのみなりゆくは、おほかた世のなしならんかし。御覧じはてゝかへらせ給ふ。十一時ばかりなり。十一日。けふも天気よし。例のうちにまゐりて、ひるのつかたま」（二十二丁表）かてぬつくゑのまへのまどあけたれば、かきこしながらいと近きとなりの八重桜のけふをさかりと咲にほひたり。みつゝをるほどにやどの女の文もてきたり。ともだちのもとより、おほやけごとのいとまあらば、御室の花見にものせんとあり。このひと日二日あまりにのどかなりつるに、今日はひるごろより、少しくもりぬ。明日といはゞ雨にもやならんとおもへば、やがていでたちぬ。ゆきてみれば、少しさかりは過たれど、松のかけなるつゝしのさきそめたるにほひありたるなど、いとをかし。むしろうちしきて、わりこひらきてしばしやすらふ。」（二十二丁裏）

年ふれどこまつのさとのさくらばな木高からぬがおもしろきかな、かへさには平野をすぐ。こゝも、またはなはさかりなり。それより宇田どの・ものすけによばれ、下鴨のなにがしの家にゆく。宮の大夫をはじめ、こたびみともの人々きあひたり。九時すぐるころ、やどりにかへるゆふべに成て、雨ふり出たれと、しめやかにて、なか〳〵よかりき。今日みともの女房五六人、いとまたまはりて、石山まうでしたり。大津にて柳のないじ、

さゞなみのおほつのみやはあともなしたかきみいつはよにのこれども、とよめりとぞ。」（二十三丁表）

十二日よべより。雨ふりたれど、今朝は雲間みえそめて、やゝはれんとす。きのふにひきかへて、北かぜいと寒し。山内書記官、奈良へ行く。こは大和行啓のためなるべし。午後一時よりうへ宮もろともに、山階の宮の家にわたらせ給ふ。みとも例のごとし。おとゞはじめ、京都・滋賀の知事なども皆めされたり。このみこは、まれなるよはひにおはしませど、いとすくよかにおはしまして、おほやけさまにも、よろづまめ〳〵しうつかへまつり給ふを、うへ宮もことにおもほし給ふなるべし。けふのおほんまう

けに、舞台などしつらひ給ひて、能楽御覧せさせ給ふ。みけしき、いとうるはし。みこの家のをとこ、女」（二十三丁裏）より、能役者へも禄たまひぬ。午後六時過ころ、能楽はて、おほみきならひに、おもの奉りたまふ。あるじのみこをはじめ、みこたち・おとゞ、その外やことなきかぎりは、みなおほんまへにて、みきたまはる。かく日月の光をならへ、むかへさせ給へるみこの家のめいほくなるべし。八時過るころ、うへ宮もろともにかへらせ給ふ。今日ひと日、村雨たちたれど、雨もさのみはふらず。御あるじはさるものにて、みとものものまでも、たよりよかりき。みおくりし奉りて、やどりにかへりしは九時過なり。

十三日、天気よし。朝とく山階の宮、きのふわたらせ給し、かし」（二十四丁表）こまり申に、まうのほり給ひぬ。けふはいでましてもなし。日曜日にさへあれば、とくまかでぬ。今日京都のならはしに、十三まゐりとて、十三になるをとこ・女、嵯峨のこくうぞうにまゐりて、さいはひをいのることなり。ことに休暇日なれば、子どもにひかれて、よめもしうとめも、そでをつらねてまゐる。いとにきはゝし。おのれもともだちにそゝのかされて行たれど、嵐山のはなものこりなければ、天龍寺へ行く処のさまものさびて、昔ゆかしうおぼゆ。後嵯峨・亀山のみかどのみゝさぎをゝがみ奉りて、宝物など見ゆるおほかたは、書画なり。ゆかしとおぼゆるもおほかり。この寺もる法師はともだちのし」（二十四丁裏）るひとにて、茶・くだものなどいたしてもてなす。先帝のおほんよの末、兵火にかゝりてやけたりしむかしがたりなどしけるに、いくばくもへざるとし月など、とかくめでたきおほみよにくらぶれば、おなじ世界ともおぼえずかし。

うきしづむうき世のさかをいくぞたびかぞへきつらん亀のをの山、かゝるわたくしごとは、かゝてもありぬべけれと、みなこたびのみめぐみのあまりなれば、忘れはてんもさすがにてなん、今宵山内書記官、奈良よりかえる。

十四日、小雨、例のうちにまゐることなし。

十五日、雨、佐世保・呉の鎮守府へ行幸。奈良・兵庫県へ行啓。仰い」（二十五丁表）ださる京都御発輦は、ともに十八日とさだめらる。おのれも行啓のみともつかうまつるべく、さらにおほせくださる。

十六日、雨はれず。さみだれめきたり。今日はうちのおとゝのおほんちゝ君忠成公の三十年の祭りにて、宮よりも梨木神社へ、山内書記官をみつかひにつかはされて、幣帛料・神饌料をたまふ。おとゞもこのごろ京都におはしまして、したくつかうまつり給ふ。今宵、府知事、みともの判任官を八坂の中村楼によぶ。

十七日、雨はれたり。いともあたゝけし。午後二時より宮、桂離宮へわたらせ給ふ。みとも例の如し。ことに召させられたるは」（二十五丁裏）有栖川のみや、山階のみや、小松のみや、ならびに御息所をはじめ、おとゝ北垣府知事などなり。此かたぐ〳〵は、先に離宮にまゐりてまち奉る。みかどいでさせ給ひて、堺町を三条へ、大宮を七条より西にをれて、桂にわたらせ給ふ道々、さとびとの迎へ奉ること、例の如し。桂川の橋も。先づとしの洪水にそこなはれて、近きことつくりあらためられたり。ありしには似ず。いといかめしきはしなり。離宮には人々みかどの外に迎へ奉る。例のみくるまよせより、いらせたまふ。けふのおまし所は、御幸殿にて召されたるかたぐ〳〵は、古書院にさぶらひ給ふ。しばしいこはせ給ひて、宮には古書院のすの」（二十六丁表）こよりおりさせ給ひて、御園のうちにあゆませ給ふ。宇田とものすけ、冷泉殿掌案内し奉る。みともには、みこたち、おととみなつかうまつり給ふ。先月、波楼より御池の柴はしをわたりて、紅葉山そてつ山を

へて、かの名たかき二重升の手水鉢など御覧し、御池のきしながれ、手水のほとりを過て、松琴亭へいらせ給ひ、こゝにてしばしいこはせ給ふ。それより又はしをわたりて、鳥山のそば道をめぐり、賞花亭の御茶やにわたらせ給ふ。軒にたつたやとしるしたるのれんは、尊朝親王の御筆なり。それより鳥山をくだりて、南さまに園林院にわたらせ給ふ。この御堂のまへに八重ざくらのちりのこり」（二十六丁裏）たるか、今日の行啓をまちえかほなる、いとをかし。園のうちはおほかた夏めきたる若葉のなかに、たゞ一本のこれるが、ことにあはれなるに、明日行啓あるべき奈良の都のたねなりとさへいふに、人々めとまりけんかし。

それより笑喜軒にてしばしいこはせ給ひて、やがてもとのすのこよりおましにかへらせ給ふ。御かた〳〵は、古書院にてみき給はる宮もわたらせ給ひて、おほせごとなどあり。みともの高等官も、みきたまはる。ことはてゝ、午後五時五十分にかへらせ給ふ。おほんみおくり、みこたち、おとゞつかうまつり給ひ、この離宮は豊臣関白の八条のみこのために、小堀遠江守におほせてつ」（二十七丁表）くらしめしにて、早くより世にありがたきものにもてはやされて、今の世の庭園のゝりともあふぐめり。園のうちは更にもいはず、殿つくりよりはじめて、おろかなるふしなく、名たかき工のこゝろをつくしたる障子のゑかなものまでなべてならず、このとのゝことは、へちにくはしくしるせるものあれば、もらしつけふは、天気ことによく、ちりはかりの雲もなく、にはかに夏めきたる空のけしきに、おほんうちはゝなきかなと女房のあづかりありきしも、をかしかりき。おのれはかへらせ給ひしあとにて、けふわたらせ給へるみ園のうちに道のついでなど、宇田どのものすけにつきて、うけ給」（二十七丁裏）はりつゝしるす。やどりにかへりたれば、ともしびつきたり。明日は奈良にたゝせ給ふにつけても、しばしのほどなれど、京都にありつきて、更にたびたつこゝちす。人々そゞろきたちて、やどのうちいとさりかし。

十八日、天気ことによし。だれも〳〵とく起て、御所にまゐる。かねてみさだめの如く、うへは午前六時四十分にみかどいでさせ給ひて、停車場にいたらせ給ひ。宮には八時にたゝせ給ふ。樗のないじの京都にのこるとて、

いでましをいはひながらもさびしさにのこるたもとをぬらしけるかな、ことわりなりかし。みとも例の如し。府知」（二十八丁表）事のかはりには、尾越書記官みあとにしたがひ、警部はみさきつかうまつること、つねのごとし。たゞちにふしみのかたへといでます。しばしのほどの御わかれなれど、おなじ日にいでたゝせたまひて、西南に行わかれさせたまふらん、みくるまのうちにも、いかにおほんかへりみかちにおはしますらんかし。みとものものも、これまでおなじやどりに起ふししたるものゝ、かた〳〵にたがひ奉りてわかれ行ほど、さすがになごりをしうなん、京都をはなれさせたまへば、伏見の工兵営所より儀仗兵そこばく藤森まで御迎にいでたり。やがて墨染を過て、営所にいたらせ給ふ。おまし所は、集会所」（二十八丁裏）にて、せまけれど、きよらかにしなしたり。おましは南向にて、東のかたに庭あり。池に金魚あまたはなてり。牡丹の花の盛なるに、桜のおくれたるなどもみゆ。しばらくいこはせたまひて、十時五十分にこゝをたゝせたまふ。それより淀川の観月橋のもとにて、みくるまおりさせたまひて、はしのうへをながらはかりあゆませたまへるとき、川中よりひゞきて、水雷火おこる。川瀬の水ましろになりてあがること、五十尺ばかりうちつゝきて、みたびよたびあがりたり。宮もめづらしとや、御覧しけん。しばしの上にやすらはせたまへば、御床凡など奉ることはてゝ、又みくるまにめさせたまふ」（二十九丁表）。これ

よりたゞちに堤つたひに向島・下島・上島・槙の島をへて、宇治にわたらせたまふ。日かげのとかにうちかすみて、川原のけしきえもいはず、をかし馬あはれと、ひし、こはたのさと、岡のやのあたりなど、ほのかにみゆ。朝日山もいと近し。それより宇治橋のつめなる万碧楼にいこはせたまふ。こゝまでひるのおもの奉る。此家より見れば、川のけしき、更によし。舟のきしによこたはれるをみて、柳のないじ、

　みくるまのかよふみちにやいでぬらんさす人もなし宇治の川

舟、こゝは平等院をばしめつりとのなど、うちのおとゝの昔のあともなつかしう、その外もみどころいとおほ」（二十九丁裏）かれと早く御覧せられしかば、こたびはこゝよりたゝちにたゝせたまふ。町をはなれて、やゝ坂道をのぼりてくだり、はづれは新田の追分にて、京都より奈良への大路なり。すこしゆけば、左りの方に久世神社あり。又少しゆきて、水度神社あり。それより長池の御小休所辻本九兵衛の家にいらせたまふ。午後一時五分なり。おましところきよらにて、庭にいと清きはしり井ありて、ほそき流にひこひむれゐたり。おましにはかめに牡丹・桜の花のいとおほきなるえださしてあり。またかゝる桜もありとおもへば、行先もいとたのもしきこゝちす。こゝをたゝせたまひて、あを川を過て、木津川のつゝみに」（三十丁表）のぼる。このわたり所の役人・学校など、いとおほくいで、迎へ奉る。これより井出の里はづれに川あり。これ井出の玉川なりといふ。駒とめてといへる歌は、道のほとりめきたれと、今はさるけしきもなし。堤の下なるたのもはなの花のさかりなるに、山吹の昔の色もしのばれぬ。又不動川あり。いづれもほそき川にて、堤の上をながるゝさま、おなじやうなり。行きさきにまた河あり。なると川といふ。いづれも里人のいふことなり。木津のはしづめに、御野立のまうけあり。しばらく川つらのけしき、御覧す。いと広き川原の末に、生駒・葛城をはじめ、やまと・河内の山々見えて、けしきいとよし。御迎のさ」（三十丁裏）と人とも、堤より川原の白洲まで、みち〳〵て舟にのりたるもあり。宮はこれより橋のうへをあゆませたまひ、みくるまにのらせたまふ。かりそめのはしなれば、みくるまにては、あやふきよし。あかたのつかさより、啓したるによるとかや、こよなきさひはひをえたるは、こゝにむかへ奉りしさと人ともなりかし。こきまでさやかに見え給ひしかば、みなゝみだおとして、をがみ奉る。町の入口に例の青葉もてかされる門に色々の花もて龍のまつはれるかたつくりたるは、たくみにめづらしくみえたり。町の中ほどに川あり。ゐせき川といふ。はしをわたりて御小休所飯田房次郎の家につかせたま」（三十一丁表）ふ。これもおまし所に、牡丹・藤の花ふさ、おほきなるをかめにさしたる、いとうつくし。小牧奈良県知事、こゝに出て迎へ奉る。尾崎書記官も、猶けふのみとまりまでおくりし奉る。警部のみさき、つかうまつること、例のごとし。しばらくしてこゝをたゝせたまふ。すこし行けば、岡田国神社あり。奈良坂のこなたに、山城・大和の国ざかひあり。こゝに奈良のつかさ人、学校の生徒など、あまたいて、迎へ奉る。坂はちかきころきりひらきて、車もいとやすくかよひてたよりよし。道のかたへに、新道つくりしことしるせる石文あり。この坂をこゆれば、般若寺なり。町中に佐保川あり。はしをわたりてゆけば、ゐとく」（三十一丁裏）并はしといふはしあり。これよりやゝのぼれば、雲井坂なり。杉のこのまより、一本桜ほのかみゆ。いとなつかし。このあたり、人の山をなしたり。午後四時五十分に、けふのみとまり奈良倶楽部につかせたまふ。これはこのころあらたにつくりたるにて、よろづいときよらかなり。棟あまたありて、三階楼なり。みくるまよせより、はじめておまし所のさまなど、み

やびたり。おまし所は中の楼にて、三笠山・若草山、手によるやうにて、のこり花もところぐにみゆけしき、いとよし。京都にて、菅の命婦の、

かれのこるなら山桜このはるはむかしのいろに咲」（三十二丁表）かへるらん、といひしも、今ぞ思ひてらるゝよに入て、このさとのをみなごもの御前にて、琴などつかうまつる。今日をはれとつくしたる手のかぎりにも、この日ごろの親たちのこゝろつくしさへおもひやられぬ、今宵、みともの人々、小牧知事によばれたり。おのれもかすまへられて、むしろのすゑにつらなる。酌とる女どもゝかほよきかみえき。十一時ごろ、やどりにかへる。十九日、明行空きりわたりて、めの前の若草山のほのかにみゆるも、いとをかし。おのがやどりは、武蔵野といふ家にて、この山のふもとなればなり。午前八時より春日大社へわたら」（三十二丁裏）せたまふ。みとも例のごとし。石のきざはしのもとにて、みくるまおりさせたまひ、神つかさの案内にて、廊のこなたにて御手水まゐらせて、やがて御拝のおましにつかせたまふ。かくたぐひなき御ありさまを、おほん氏神も、いかにうれしとおぼすらんかし。御拝をいれば、神殿の左のかたなる廊めく処にまうけたるかりのおましに、いらせたまふ。このしものかた、やがて舞殿にて、神楽つかうまつるやをとめのはかまに、白き衣きて、ひあふぎすゝなともてり。かみはあけたらねど、花のかんざし、さしたり。楽人五人、笛・つゝみ・拍子二人、いづれも男なり。琴はとし老いたる女、つかうまつる。何ごとゝは」（三十三丁表）えきゝわかねど、そゞろにたふとしをはりて、たゝせたまふ。春日神社へ金そこばくをたまふ。北のきざいしをくだりて、御板輿にめさせられ、山路をくだらせたまふに、かたへの木かげに、鹿のあまたゐたるを御覧して、みこしとゞめさせたまひ、女房におほせて、くだものなどたまいす。いとよく人なれて、宮人たちのさまをもみとがめず、すそにまつはるさま、いとをかし、北島のないじ、

昔よりかみにつかふるかすがのゝしかは人にもなれにけるかな、こゝをすぎて、若草山にいらせたまふ。ふもとにてみこしおりさせたまひ、少したかきところまで、あゆませ」（三十三丁裏）たまひて、御床凡奉る。こゝにてしばらくよものけしき、御覧す。そのうちみとものものに、わらひなどをらせたまふ。早蕨のすけ、

かすがのゝ若草山のさわらびもけふこそみよのはるをしるらめ、わかき女房たちは、籠をいてたる鳥などのこゝちして、足のたゆさもうちわすれて、いとたかき山のいたゝきまでものぼるに、おのれもこゝろみつれど、よそめよりはいとけはし。このうへより、みわたしたるけしき、いはむかたなし。今日は空うちかすみて、遠かたはよくもわかねど、右のかたにほの〴〵しろくみゆるは、木津川なり。又ふもとの松」（三十四丁表）のこのまにちりのこりたる、さくらのところ〳〵にみゆるもをかし。このおくつかたに鶯の滝ありといへどゆかず、おしなべてみどりなる山のすそに宮人のわらひもちて、やすらへるさま、写真にもとらまほし。こゝをくだらせたまひて、又御板輿にて、手向山なる八幡宮にたちよらせたまひ、それより三月堂・二月堂を御覧す。いづれもふるきものなり。二月堂ことにめでたし。台ありて、みわしよし。この上より、猶あふぎみらるゝ杉の老木は、ちとせにちかきものとぞみゆる。宮にはみこしのうちより、そこら御覧して、大仏の楼門のまへにて、みくるまにのらせたまひて、九時五十分ばかりに、倶楽部に」（三十四丁裏）かへらせたまふ。ひるのおもの奉りて、更に一時ごろより、大仏にわたらせたまふ。楼門の右のきざいしのもとにて、みくるまおりさせたまひ、御かちにてまゐらせたまふ。ひるよりは雨ふりいでたるに、ならはせたまいぬ御

かちありき。いとかしこし。大仏御覧して、かたはらなる博覧会場をめぐらせたまふ。木仏・陶器・武具など、いとおほかり。いづれもなつかしからぬはなし。殊にたくみにありがたくおぼえしは、仏像なり。これをみるにつけても、かみつよゝり、中昔かけて、仏の道のさかりなりしこと、おもひやらる。又奈良の産物とも、おほくつらねたり。みな御覧していでさせたまふ。東大寺へ金そ」（三十五丁表）こばくをたまふ。今までは雨いたうふりかしかどやゝやみたり。これよりみくるまにて、正倉院へわたらせたまふ。宝庫のものとも御覧せさす。みくらのうちへはえさらぬ。みともの外はみなゆるされざりければしらず。外にまち奉るほどの久しかりしにも、くさ〴〵御目とまりしほどは、おもひやられぬ。御覧しはてゝ、事務所にて、しばらくいこはせたまふ。かへさにはみくるまながら、猿沢の池のほとりのけしきなど、御らんして、興福寺へ立寄らせたまふ。金堂は近きほどつくりたるものなど、のこれる石ずゑをみるにも、昔のおもかげおもひやらる。三重塔・北円堂のみは、もとのまゝなり。いとた」（三十五丁裏）ふとし。こゝにも、金そこばくをたまふ。この道のあいだに、むれ居る鹿のきゝもならはぬあまたのくるまのおとにおどろきて、うちつれ〴〵にけ行く状、いとをかし。かへらせたまふみちに、春日の社の石灯籠のかたはらに、雪消の沢としるすの札ある、少し水のたまりたる処に、今にけし鹿のかしらあつめてゐたる、又をかし。こゝのあたり、すべて昔なつかしからぬはなし。倶楽部にかへらせたまひしは、午後四時二十分ばかりなり。御道のほどは雨もやみて、みくるまをなむ人人もいとおほかりき。

久かたの雨のあしさへみくるまのすぐるあひだはと」（三十六丁表）まりけるかな、たはふれに似たるも、かしこしやかへらせたまひて後、この庭の南おもてにて、大和万歳つかうまつる。宮は樓のおましより御覧す。なかの人の装束してねりいでたるさま、まつをかしまへに四人うしろにつゝみもたるものおなじさまにて、二人すべて六人なり。あやしくふるめいたる。ことゞもうたひて後には、四人にてうたひまひつ。狂言のやうなることをす。東京にみる三河万歳とはやうかはりて、やゝ古雅なり。これらをはれば伊勢神楽とて、しゝまひつかうまつる。東京の太神楽といふものに似て、ものゝしらべ、少しゆるらかなり。これもふるめいたるものなり。しゝまひ」（三十六丁裏）はてゝ、さま〴〵のわざ、つかうまつる。かるわざなど、よくれんしてみどころあり。ことはてゝ、ゆふべのおもの奉る。又夜にいりて、さらにたきゞ能といふことあり。庭の東おもてにかゞり火たきて、芝生のうへにてつかうまつる。このさとのふるきならはしなりとぞ。はかなきわざもきさいの宮に御覧せさせむとて、とり〴〵におもひまうけたるこゝろざしは、さすがにあはれとおぼすらんかし。

廿日、小雨をり〴〵ふる。六時三十分にいでたゝせたまふみとも、例の如し。猿沢のいけに、ほとりをすぎて、奈良の町をはなるれば、めをとばしといふはしあり。そこより野道にて、け」（三十七丁表）しきよし。いこまやまも、右のかたにやゝうしろさまになりて、みゆうちわたす。田のもの菜の花もおほかたみになりたり。春もふけたるべし。飯合川のはしをわたれば、帯解村なり。戸数百五十ばかりなりとぞ。村なりに川あり。地蔵院川といふ。これをすぎて櫟本村字蔵の荘にいたる荘のなからばかりにほたいせん、川の大橋あり。わたりゆけば、字楢村といふ。楢大明神の社あり。すべてこのわたり、櫟本村なり。戸数六百ばかりといふ。道の左に人丸の祠あり。警察署・郵便支局などありて、よき町なり。町はづれに在原神社あり。これまでのあひだ、葛城石にみゆ。むろひにみゆるは多武峰なり。巻向」（三十七丁裏）の檜原・弓槻嶽など、

や、近くなりてけしきよし。森石上田部河原城などいふ村々をへて、丹波市にいたる道の左に官幣大社石上神社の建石あり。こゝにも青葉もてかされる門に木の実・花などにて、龍のむかひあひたるかたつくりたり。町なりに青石川あり。これをわたりて、御小休所中山平八郎の家につかせたまひしは七時四十分なり。しばらくありて、こゝをたゝせたまひ、三昧田をすぎて、成願寺村・新泉村にいる右の方に官幣大社大和神社の鳥居あり。こゝに神つかさいでゝ、みくるま迎へ奉る。これより岸田市場をすぎて柳本なり。戸数三百ばかりといふ。郵便支局などあり。野道にいづれ」（三十八丁表）は、左のかたに引手山みゆ。少し行は崇神天皇・景行天皇の御陵のしるしの札あり。これより巻向村字辻といふところにいる。左のかたに穴師神社あり。織田村字芝といふ町の入口に北口川はしあり。戸数二百ばかりあり。又野道にいづれは多武峰の谷々、まむかいにいと木ふかくみゆ。馬場崎をすぎて、三輪大神々社教会所にて、いこはせたまふ。おましところもいときよし。黄なるつゝしに白き藤の花の大きなるを、かめにさしたる、いとめづらし。これより三輪の本社へまゐらせたまふ。五丁ばかりなり。かねてみさだめの外なれば、神つかさ、あわてまどひて案内し奉るには、かのおぼしよりにて、」（三十八丁裏）ことに神つかさもありがたくおぼえけんかし。

三輪の山きみをまちえてとしをへし杉のしるしはけふぞみえける、などおもふほどにたゝせたまふ。このさとは警察署・郵便支局などありて、ことにゝきはしきもひとへに大神のみいつによれるなるべし。町をはなれて、道の左に志貴御県座神社あり。これより初瀬川のきしにそひて、朝倉村に入る。大神々社摂社玉別神社なり。字黒崎をすぐれば、初瀬川の入口なり。みくるまむかへ奉るさと入いとにぎはし。長谷寺の石のきざはしのもとより御板輿たてまつりて、たゞちに回廊をのぼらせたまひ、観音堂にいらせ賜ふ。回廊のかた」（三十九丁表）はらなる牡丹はいまさかりなれど、昔みしやうにもあらず。こはちかきころ回廊のやけたるをりに、そこなはれたるなるべし。台をめぐりて御覧す。けふは村雨のくもたちまよひて、みわたしもさだからず。いと口をし。やがてもとの回廊をくだりて、御小休所小池坊につかせたまふ。金そこばくを長谷寺にたまふ。こゝにて宝物など御覧せさす。ひるのおものたてまつりてたゝせたまふ。これより追分まではもとの道なり。追分を左にをれて、初瀬川のはしをわたれば桜井の道なり。式島村字外山といふ戸数百八十ばかりあり。一時十五分ばかりに桜井につかせたまふ。今宵のみとまりとさだ」（三十九丁裏）めたる来迎寺にて、しばらくいこはせたまひ、更に多武峰にいらせたまふ。もとの道をすこしかへりて、桜井の町を右にをれて、川にそひてやゝのぼれば談山一の鳥居あり。こゝにて御板輿たてまつり、しばらく行ば、下居の入口に青き竹をあまたつかねて、おほきなる鳥居のかたをつくりたり。寺川の下居はしをわたれば、谷川右に見ゆ。少しのぼりたる処に水車などあり。川中の島のやうなる大岩にせかれて、右左にわかれおつるはやせのけしき、いとよし。不動坂のあたり、谷川のけしき、いよ〳〵よし。東門の大橋やねあり、からかねのきほうしなど、昔ゆかしきさまなり。はしをわたれば谷川の」（四十丁表）岩のうへをながるゝ水のけしき、いはむかたなし。ながれにそひてのぼりゆくまゝに、杉のはやし、いと木ふかくして、ものすこし雨はやみたれど、いとくらし。石はしのもとに女人塔あり。少し左に女道としるしたちたる石あり。なほのぼれば、左のかたにうし石といふあり。そのもとに、おほきなる八重桜の、いまをさかりなるあり。若木もふたもとみもとみゆ。いとめづらし。これにても、山のふかきほどはお

もひしらる。燈籠の辻といふところに、農具もておほきなる燈籠のかた、つくりたるあり。又御小休所舟橋勇の家のまへに、青葉もて、皇室万歳といふ文字をつくりたるたて札あり。さていらせたまへ」（四十丁裏）ば、おまし所には、松・牡丹・藤の花をかめにさしたる、いとうつくし。しばしいこはせたまひて、御板輿にて、本宮にいたらせたまふたかき石のきさいしをのぼれば、楼門のまへなるみたらしのかたへに菴羅樹といへる古木あり。又かたへの山そばに、槙の枝したりたるが、苔むしたるさま、いくもゝとせをへしものともしられず。いとめづらし。宮の御こしは拝殿の廊にかきあけあたれば、おりさせ給ふ。これより神つかさの案内にて、回廊より本殿にわたらせたまふ。拝殿にかへらせ給ひ、宝物など御覧す。これより御かちにて、鎌足公の御廟十三輪の塔にまゐらせたまふ」（四十一丁表）。この御神のみすゑのみさかえは、いふもさらなれど、ためしなきいまの大御代に、又このみすゑのきさきにたゝせたまひ、昔にまさるみひかりをみたまふらん。神のみこゝろも、いかにうれしとおぼすらんかし。こゝより又御いたこしにて、舟橋の家にかへらせ給ふ。午後四時なり。談山神社へ金そこばくをたまふ。をりよく雨もさのみはふらず。これも神のみはからひならんかし。しばしありて、たゝせたまふ。牛石を少しくだりたる処に、淡海公のみはかのしるしあり。又さかしき坂道をくだれば、ながらばかりに見どころある滝あり。華厳の滝といふなど、のぼりには見つけさりけんとあやし。こ」（四十二丁裏）よれより宇倉橋といふところの道かたへに、崇峻天皇の御陵のしるしの札なり。かへさばすべてもとの道なり。桜井につかせたまふは午後五時四十分なり。けふは道も遠く、けはしきに雨さへふれば、みとまりはかならず夜にいたんと、あがたのつかさ人のおもひばかりにて、たいまつの用意などしたりしに、みいこひどころも、しばしのほどにて、いとゝくかへらせたまへれば、よるのまうけは、不用になりぬるこそ、だれも〳〵いとうれしかりし。かゝへらせたまひて後は、雨もいたうふりいでたり。此さとは、このあたりには、いとにきはゝしきところにて、戸数六百ばかりなりといふ。今宵は、こ」（四十二丁表）のさとの女のわらはの琴ひくをきかせたまふ。けふは一のとりゐより道もせばければ、みともの人もえさらぬかぎりしたがひ奉りて、のこりのものは、ひるより皆桜井にとまりぬ。

廿一日、空はれて、こゝちよし。みさだめのごとく、朝七時にたたせ給ふとも、例のごとし。桜井の町、いづれ寺川の小西ばしをわたり、宇谷といふ処より式島村字戒重にいつ田のもいとひろくて、けしきよし。右のかた、はるかにいこま山みゆ。右にまぢかくかつらぎ山みゆ。かく山は、左のかたの田中にひきくみゆ。むかひに木ふかくみゆるは、すなはち、うねび山な」（四十二丁裏）りといふ。耳成山は、うねびにむかひて、右のかたにおなじほどにみゆ。げにあらそひもしつべく、いとをかし。さと人は、天神山とぞいふ。耳成村鴨公村を過れば、八木の入口なり。おほきなる日のみ旗、さしちがへにたて、、紫のまくなどうちたり。学校の生徒、男女の姿など、あてはかなり。戸数四百ばかりなりといふ。これより飛鳥川の高橋といふ、ちひさきはしをわたりて、左にをれてゆけば、畝火山東北御陵の道なり。御小休所勅使館につかせたまへるは、十時四十分なり。しばらくいこはせたまひ、みくるまにて、御陵の石門の外までわたらせたまひ、こゝにておりさせたまへば、橿原神宮の宮つかさ、」（四十三丁表）案内し奉りて、御拝のおましにつかせたまふ。みともの人々は、みな石門の外にさふらふこのとき、

広まへにたまぐしとりてうねびやまたかきみいつをあふぐけ

ふかな、とあそばされしよし、後にうけたまはりき。かしこけれと御歌からさへ、いと〳〵けだかうあふれかるれば、おほかみも、いかにうれしとおぼしたまひけんかし。又早蕨のすけ、

うねび山のぼりてみればちはやぶる神代もちかくおもほゆるかな、御拝をはりて、みくるまにのらせ給ひ、いでさせたまふ。道のかたはらに、牟佐田神社あり。堺村字平田とい」（四十三丁裏）ふところの左に、欽明天皇檜隅坂合の御陵のしるしなり。このわたりみわたすかぎりみどりにて、菜の花のなごりもなし。右のかたにたかとり村の観覚寺なり。たかとり川にはしあり。ますやばしといふ。右のかたに岡宮天皇御陵あり、もり村をへて、さつま村にいたれば、右に斉明天皇の御陵のしるしなり。この道より十六丁といふ。これより吉備川の橋本ばしをすぎて、舟蔵村字如来寺といふ処より、戸毛川にそひて戸毛にいり、御小休所西尾孝平の家につかせ給ふ。九時十五分なり。このさと、戸数数百ばかりなり。こゝにてひるのおもの奉る。こゝをたゝせたまひて、今木川の新橋をわたりて、左へ」（四十四丁表）をれて行けば、吉野郡なり。宇淀村といふ。道の左に坂合黒彦王のみ墓あり。これより車坂にのぼる。きのふの多武峰の道にくらぶれば、けはしともおぼえず。たうけの少し南にくだりたる処に、御野立のまうけあり。こゝにしばらくいこはせたまふ。みわたしひろく、けしき、いとよし。左のかたにはるかに山みゆ。龍門嶽といふ。参謀本部のものみ台なり。さしつきに高見山見ゆ。これ大和・伊勢のさかひなりとぞ。そのつきにたかく秀たるは大峰の小天井にて、うしろのかたにつらなりたるは大天井なりといふ。名をきくもいとおそろし。それより少し近くひきゝが、よしの山なりといへど、今日はうき」（四十四丁裏）雲きりあひて、さだかにみえず。それより右なるは釈迦嶽、又右のかたに遠く見ゆるは銀峰山なりといふ。金峰山は、すなはちよしの山のことなり。みゆるかぎり八重山うちかこみて、屏風をたてめぐらしたるが如し。うちわたすめの下に吉野川のながれ見ゆ。きしをへだてゝ、さとのみゆるは下市なり。少し左のかたの川ぞひの森の木かくれに見ゆるが、このつきの御小休所越部なりといふ。さてこゝは、御野立なれど、まうけよくして、よろずめやすし。このわたり小松まじりにつゝじのはなさかりなり。花のいろは皆うすし。おのれは少しみさきにたつ。ゆく〳〵」（四十五丁表）

車坂小松まじりのつゝじはらうちにてみたきところなりけり、坂をくだれば、つれはよし野山のきしにて、下淵村なり。戸数二百あまりといふ。大淀村字土田に鷲本ばしといふはしあり。これをわたれば越部なり。又ひとつばしをわたれば、御小休所なり。この吉條久米徳はよき家なれど、すべてはいとさびたる村なり。これより御板輿にて、みとものものも、高等官・女房は賀籠たまはるこゝをたゝせたまひて、たゞちに字北六田にわたらせたまふ。下淵よりは、すべて吉野川のきしつたひにて、けしきよし。柳のわたりは、こたびいでましのためにとて、かりのしは、はしかけたり。川原にみくるま」（四十五丁裏）をがむさと人のうちつどひす。そからけて浅瀬におりたてるもあり。川中にふねのつなもて、いとおほきなる花瓶をつくり、木草のはなとも、いとおほくさしたり。橋のかみしもに、舟もあまたみゆ。いかだなどさして、御覧せさす。みなれたまはぬ宮人たちは、いかにおかしとみたまふらんかし。はしをわたれば、六田のさとなり。たかせさす六田のよとゝよまれしも、このわたりなるべし。少し行けば、左曽村のさかひに、舟山ばしといふはしあり。いとあやしき名ぞつきたる。これより坂道、いとけはし。坂のなからより見れば、川むかひに増口のさとめの前にみゆ。けしき、いとよし。猶のぼり行は、道

の右」（四十六丁表）左にたてる並木のさくらも、のこりなくちりはてたり。青葉のかげに、さと人のけふのみまうけにとて、くれなゐの提灯いくらともなくかけつらねたるが、ひとり時えがほにはなやきたるもをかし。みくるまをがまんとて、つどへる人は花のときよりもにぎはし。鮫島の陸軍中佐、

みちすがらいはひむかふるたみくさのこゝろはみよのはなにぞありける、柳のないじ、

家がすはありともみえぬ山がけのみちのまに〳〵人のむれたる、又学校の生徒をみて、早蕨のすけ、

みよしのゝよしのゝおくにすむしつも道をしへくさ」（四十六丁裏）つむよなりけり、長峰よりかへりみれば、左にかつらぎ山そびえたち、いこま山は右のかたにはるかにみゆ。うちめぐるよしの川のへだてゝ、上市のさとみゆ。山のそばに、さしいでたる松の木のまに、かつ〳〵みゆるは、飯貝のさとなり。今少しのぼれば、丹治のさともみゆ。けしきいはんかたなし。のぼりはずれは左のかたの山そばのさしいでたる処に碑あり。さと人は歌塚といふ。いかなるゆゑにかおぼつかなし。こゝよりみわたしことによし。長峰の右のかた少したひらかなる処に、吉野宮建築地としるしあり。こゝにちりのこりたるさくらをはじめてみる。又少し行ば、右のかたに村上義光の」（四十七丁表）碑ありて、御小休所は一目千本といふところなり。みわたすかぎり、青葉のみしげれるなかに、たゞひと木、ちりのこりたるをほのかにみつけたる。なか〳〵になつかしうみなひとめとゞめたり。この花の宿世のほども、いとうらやまし。宮の大夫、

わがきみのいでましまちておそざくらみやまかくれにちりのこりけん、新樹のすけ、

はるすぎしよしのゝ山のさくらばなみかためとやちりのこりけん、早蕨のすけ、

みそなはすけふまちがほによしの山のこれる花のな」（四十七丁裏）つかしきかな、北島のないじ、

ちりのこるよしのゝおくのさくらばなきみをまちえていろやぞふらん、なほおほかれと、さのみはとてなん。けふは千目一本とや申べからんといへば、柳のないじのきゝつけて、をかし。かしりもをりからにこそ、しばしこゝまで御茶・くだものなど奉りて、たゝせたまふ。昔みしからかねの鳥居も、近きとしのあらしにたふれて、石ずゑのもとにあり。かの義経の妾の静のとらはれしあたりといふ。大はしをすぎて、まづ蔵王堂に立よらせたまふ。金そこばくをたまふ。これより吉水院へわたらせたまふ。こゝはしばしわたらせたまひ」（四十八丁表）しかり宮どころまで、おましなども、そのまゝにいとかりそめなるを、御覧せさせたまふに、その世のことおほしいでさせ給ふなるべし。御なみたくませたまふみとものものも、さしうつぶきて、ものいふものもなし。宸翰ならびに手ならしたまひしみ調度など、はかなきものさへありしまゝなるが、いとかなしさ、わらびのすけ、

みやゐせしむかしおもへばみよしのゝよしのゝはるもかなしかりけり、北島のないじ、

いにしへのみやゐときけばさくいなのかけもかなしきみよしの、山、梢の命婦、」（四十八丁裏）

よしのゝやまのこるみやゐのあとゝへは杉のしづくもそでぬらしけり、これより塔の尾のみさゝぎへわたらせたまふ。これはましていはむかたなし。をりしもこのころの雨に、いろあせたるさくらのふたひら・みひら、いつくよりともなく、風にふかれて、御衣にちりかゝりたるに、

よしの山みさゝぎちかくなりぬらんちりくる花もうしめり

つゝ、とあそばされしは、あたりのそでまで、時ならぬしぐれをぞもよほしける。やがてみゝさぎまゐりて、御拝せさせたまふ。早蕨のすけ、

塔のをのみやまさびしきみさゝぎになみだのほかは」（四十九丁表）なにをたむけん、宮の大夫、

そのかみにわれもありせばおほきみのしこのみたてとならましものを、とありしは、いとをゝしく、今のおほみよのはじめ、つかたのことさへ、おもひいでらる。又如意輪堂にわたらせたまひ、正行朝臣のかたみのとびらなど御覧す。柳のないじ、

あづさゆみやじりなどの万世につらぬくものはまことなりけり、吉水院如意輪堂へ金そこばくをたまふ。かぎりあれば、こゝをたゝせたまひて、竹林院のみとまりにつかせたまふ。五時四十分なり。なほおほむなごりつきせず。」（四十九丁裏）

むらさめははれたるけふもふりしよのみやゐたづねてそでぬらしけり、とあそばされけるに、にはかにまた村雨ふりいでたり。今宵、竹林院にて後醍醐帝の宸翰よりはじめ、にしきのみはたに侍りて、そのよのみものがたりなどきこえ奉るをきゝゐて、柳のないじ、

いまもてにあせをぞにぎるよしの山くちをしかりしむかしがたりに、又、

こゝろありてちりはてぬらんや桜むなになぐさむところならぬは、女房まで、かくとりぐ〳〵におほやけざまの」（五十丁表）こゝろざしふかきは、ひとへに宮のみこゝろおきてによるなるべし。なりがたしとも、いとかしこし。このてらの庭園のさまこそ、いとをかしけれ。木草のさま石のすゑやうなど、わろものゝしわざならず。かゝる山中にいかなる人かつくりけんと、いとゆかし。又けふすきさせたまひし弘願寺のほとりに、白き布もて、滝のやうにつくりたるをゝかしと、御覧したるよし、これはこのよしの、山は宮滝をはじめ、たきの名どころ、いとおほかれど、みな深山・幽谷にて、みくるまのゆくべきところならぬは、御覧せさせぬが、口をしさに、さと人のさるこゝろして、かくつくりて御らんせさせしを、を」（五十丁裏）かしとおほしけんかしと、大夫のものがたらせし。又はる〳〵をさかしき山路をりけさせたまへる。かひなく花のちりはてし口をしさなど、啓したまひしに、それもさることにはあれど、こたびやまちをわけこしは、いにしへのあとをも、したしくとひ奉らんの本意にしあれば、さのみ花にうらみもあられとおほせられしよし、いと〳〵ありがたくこそおぼえしか、けふよしの山にうけたる提灯の数三千にあまりたるよし、はかなきことなれど、この国人のおほやけのためにこゝろをつくすことは、こと、ころには似ず。こよなくこそ。」（五十一丁表）

廿二日、よべより雨ふりたれど、今朝六時ごろよりはれぬかねて、七時三十分にたゝせたまふべきみさだめなりしかど、きのふの坂道に人々のつかれたらんをおぼしめしてにや、今朝八時にたゝせたまふ。今日うねびやまゝではきのふの道なり。雨のなごり、吉野の坂道いとわろく、車ひかれるも、いとほしければ、よべのやどり、喜蔵院よりたゞちにわらぐつはきて、みさきにたちいでぬ。吉野川をわたりて、大淀村字北六田にて足をあらひ、車にのる。今日の坂道は御こしのうちもやすからずやおはしつらんと、いとかしこし。越部にて、ひるのみさだめなりかど、おもひのほかにはやかりしかば」（五十一丁裏）、にはに戸毛の御ひるにはなりぬ。車阪のたうけ、きのふの処までしばしいこはせたまふ。戸毛につかせたまひて、ひるのおもの奉る。こゝをたちいでさせたまひ、うねびやまのふもとを、きのふのみちより、南にをれて、七八丁ばかり行ば、清きまさこしきたるは橿原の神宮なり。いまだみやし

ろ拝殿のみにて、鳥居などはいまつくるほどにて、かたばかりなり。されど思ひなしにや、いとたふとし。鳥居のもとに下乗の札あり。宮は拝殿のきざはしのもとにて、みくるまおりさせたまひ、宮つかさの案内にて御拝せさせたまふ。うねび山はやがてうしろなれば、おのれはのぼりて」（五十二丁表）みるに、いとさかしく、七八丁ばかりなれど、いはねづたひのあやふきにあせあえたり。いたゞきには畝傍山山口神社あり。祭は陰暦の六月三十日なりといふ。西南のかたにかつらぎ山高くそびえ、耳成山は田中にすりばちふせたらんやうにみゆ。うちわたす田畑の中に森の木立、さとのいへゐなど、ところ〴〵にみゆるけしき、いとよし。しばらくいこひて、もとの道にくだるふもとの林のなかに、やしろあり。十二社権現なりといふ。宮にはこゝをたゝせたまひ、東北御陵のまへ、きのふの勅使館にて、御小休あり。これより大路をへだてゝ、少し北さまなる綏靖天皇の御陵にまゐらせらまふ。御拝式の」（五十二丁裏）ことし、きのふの道を八木までわたらせたまひ、八木の町中より左にをれて、今日のみとまり田原本にいらせたまふ。八木をはなれて、田原本までは川ぞひの堤道なり。田原本にいたれば、例のみ迎の人々、いとおほしことに、裁縫教員とか、むらさきの衣にひのはかまきて、うちそろひたる、いとうつくしうみゆ。このさとは戸数六百あまりといふ、みとまり浄照寺につかせたまふ。午後三時五十分なり。けふもつかせたまひて後、五時すぐるころより、雨ふりいでぬ。夜になりて、花火あまたうちあけたり。またさとのこどものまひ・琴などつかうまつるを御覧す。このさとの花火は、ことにめづ」（五十三丁表）らしく、数もおほかりつれど、あやにくに雨ふりて、火のとくきえしは、いと口をし。

廿三日、雨ふる。けさも猶花火あり。九時にたゝせたまふ。みとも例のごとし。田原本を八尾のかたへ、いづれは法隆寺の道なり。寺川のおほはしをわたりて唐古にいづ。川田村をへ、初瀬川の天神橋をすぎて、布留の枝川あり。はしなり、菅原橋といふ。これより二階堂村にいたる。西は平群郡、東は山部郡なり。田中の道にてみわたし、いとよし。されど車ならずはあきもしつべきなかてなり。それより添上郡治道村にいたり、高瀬川の横田はしを渡れば、又、佐保川のゐつゝ橋あり。この辺」（五十三丁目裏）すべて井筒村なり。此の川は添上・添下の郡堺なり。みくるま迎へ奉る学校の生徒など、堤・あぜ道にみち〳〵たり。をりしも雨風はげしく、雷さへなるに、一木のかげだになき田中なれば、あまたの人のぬれそぼちたる、いたはしうみゆ。これより富緒川の堤を行、とみのをがわのたえばこそとよまれしはこれなり。はしあり。米寿はしといふ。あやしき名なれば、さと人にとひしに、こは近きころ北畠治房の母の八十八の賀にかけられたるはしなれば、しかいふなりとぞ。此あたり富郷村字高安といふ道は、大かた堤のうへなり。法隆寺の入り口に、くれなゐの提灯、あまたくものいのやうに、つなひきわた」（五十四丁表）して、かげつらねたるが、雨にうたれて落ちたるは、ときならぬ龍田のもみぢをちらしたり。みくるま迎へ奉る男女・法師など、ぬれつゝ行かふさま、わたらはにしきともいはまほしう、いとをかし。みくまは上宮王院の門の入て、中宮寺につかせたまふ。午前十時四十分なり。そのころすこし雨やみたり。さてひるのおもの奉りて、午後二時過より、法隆寺にいらせたまふ。上宮王院の門をいでゝ、たゞちに法隆寺の中の門にいらせたまひ、まつ右のかたなる聖霊院にいらせたまふ。それより楼門のもとにて、みくるまおりさせたまひて、金堂にわたらせたまふ。これは聖徳太子のときのまゝなるもの」（五十四丁裏）にて、いとなりがたく、又たぐひなきものなり。つねには戸さし

て人をいれざるよし。堂のつくりさまよりはじめうちの仏像など、げにかみつよのものにて、そゞろにたふとし。これは楼門をいりて右のかたなり。左のかたは五重塔にて現身往生塔としるしたり。こゝにいらせたまへば、このうちには釈迦の涅槃のさま、浄名文殊の不二法門のさまなどつくりて、いづれもいとめでたく、古雅なるものなり。それより正面なる大講堂にいらせたまひぬ。回廊左右にめぐりて楼門のきはにいたる。大講堂のまへにかねの燈籠あり。うしろのかたに上の堂あり。右のかたは鐘楼にて、左は大経堂なり。回廊」（五十五丁表）をめぐりて、左のかたすこしたかき所に西円堂なり。石坂をのぼりて、こゝにいらせたまふ。雨いよ〳〵はげし。御衣のうるほふも、いとかたじけなし。堂に前に台あり。みわたしよし。堂のうちの本尊は薬師如来なり。弓・太刀・鏡・櫛・笄など、数しらずあり。これはねぎことのかなひし男女、かへり申に奉れるものなりといふ。かへさに上宮王院の門をいりて夢殿にいらせたまふ。これも回廊うちめぐり、堂は八角なり。太子の御自作の御像あり。うしろに舎利殿・画殿なり。画殿は太子の御一代記をゑにかきたるなり。今のゑは後のものにて、ふるくはみえず。このうしろに伝法院なり。こゝにもい」（五十四丁裏）らせたまひぬ。中宮寺にかへらせたまへるは午後五時なり。法隆寺へ金そこばくをたまふ。今日は雨いたうふりしかば、みさきつかうまつりつる警部その外へみきたまふ。よにいりて花火などあり。

廿四日、小雨をり〳〵ふる。今日はかねては午前八時にたゝせたまふべきさだめなりしを、七時にせられたり。さるは西村大阪府知事のみむかへにまゐりて、大阪人のまち奉るありさまを啓し、博物館へ御立寄の事をねぎ申しによりてなり。いとかたじけなし。しかるにきのふよりの雨にて、ここより一里ばかりなる、大和川の明治橋のはし台の石うき」（五十六丁表）くづれたるよしにて、みくるまよひがたく、あがたのつかさ人たち、あしをそらにまとへど、ひるすぐることまで、御いでたちをのばさせたまはむことをねがひ申す。小牧知事もいたうかしこまりたるに、このよし宮の大夫より啓し奉れば、天災は力およばぬことなり。よろしきときにこそたつべけれ。きのふ・けふうへには海路よからず、しほりきのうちにとと、こぼらせたまへるよし、それをおもへば、けふひとひこゝにくらすとも、よろづたらはぬことなき家のうちなれば、みふねのうへよりはこよなかるべし。ゆめあがたのつかさよ」（五十六丁裏）いたうこゝろをくだきて、しひてことなせぞと、あつきおほせなりしよし、宮の大夫よりほのうけたまはりき。あがたのつかさのいかばかりうれしかりけんかし。

ひよりまつみふねのうちやいかならんきりたちわたるあらなみのうへに、と後にうけたまはりし御歌も、このほどのことなりけんかし。いとありがたくこそ。されどあつきおほせごと、人々いとゞつとめたるけにや、九時ころにはみくるまわたさるべしといふ。いとうれし。猶、鮫島工兵中佐をつかはされてみさせたまへるに、あやぶきことなしと申すによりて、九時にたゝせたまふ。みとも例のごとし。法隆」（五十七丁表）寺の南門のまへを過て町をはなるゝところに、龍田の新宮なり。竜田村戸数百ばかりなり。家ごとに提灯・まくなどかけて、いとにきはゝし。竜田川のはしをわたりてゆけば、きりひらきたる山路にかゝる字西山といふよし。これをこゆれば字勢谷といふ村なり。信貴川のはしをわたりて、むかひに官幣大社龍田神社のしるしなり。これより八丁といふ大路は、左のかたにをれて行、今朝つくろひたる大和川の明治はしにかゝる。いとよき橋なり。みくるまことなくわたらせたまふ。川むかひに里人のみ車迎へ奉るもの、いとおほし。少

しゆけば、大和川の落合に小川あり、はしあり。出合はしといふ。こ」（五十七丁裏）のわたり、王子村なり。この道をへて大和川のきしにそひてゆく。字藤井村をすぐれば、奈良県と大阪府との管轄さかひなり。これより河内国安宿郡国府村なり。国豊橋といふはしのあたり、けしきいとよし。橋のながさは八十間あまりといふ。これをわたれば、大和川、左にみゆ。堤のうへにさと人おほくつどひて、みくるま迎へ奉る。柏原の入口の左に、道明寺のかたへゆくはしあり。新大和橋といふ。国豊はしとこのはしとのあひだ、二十丁ばかりといふ。ひとめにみわたされて、大川のながめにめぐりたるかはらのけしき、いと〳〵よし。柏原の御小休所、寺田七郎平の家につかせたまひしは、十時二」（五十八丁表）十分なり。この家のかたへに、あらたに停車場をまうけ、かたへに活花などしたり。産物をつらねて、よろづこゝろもちゐみゆ。此家に古木の梅あり。めぐらしきものなり。花のころならましかばとぞおぼゆる。十一時といふに、汽車にのらせたまふ。このわたりは、みわたしひろく、けしきよし。八尾・平野・天王寺を過て、湊町の停車場につかせたまふ。一時三十分なり。陸軍の祝砲・奉楽あり。これよりたゞちにみくるまにて、大阪博物館にいらせたまふ。まちうけたる町々のよそほひ、田舎のめうつしには、おどろくばかりなり。博物館の門に迎へ奉る人々、いとおほし。いらせたまへば、今日をはれとつ」（五十八丁裏）らねたるくさ〴〵のものども、おるかなるはなし。みめぐらたまひて、いこはせたまふほどに、清楽の合奏などあり。おまし所に、こたびあらたに此館のかたはらにまうけたるにて、いときよらなり。繍錦堂とぞ名づけたる。さるは府知事のこたび行啓奉迎の詩に、繍錦堂天十万家といへる句をとれるなりとぞ。又知事の記文になどもあれど、ながければこゝにはぶきつ。こゝをたゝせたまひて、天神橋とほり、たゞちに梅田の停車場にいらせたまふ。午後四時なり。ことに大阪慈恵院・博物館へ金をそこばくをたまふ。こゝにても、祝砲・奏楽、先の如し。陸軍のつかさ人たちあまたおくりし奉る。これより汽車」（五十九丁表）にて舞子へといでたゝせ給ふ。神崎・西宮をへて神戸にいたる道すがら、右に武庫・有馬の山々を見、左には灘のさと〳〵のいらかのうへより、海のおもてをみわたしたるけしき、いとよし。このあたり生田のもりをはじめ、名所いとおほかれど、はしるくるまのうちには、そよといふまに過はてぬ。三宮・神戸かけて、みくるまむかへ奉る人、ひまなくたちつゞきたり。それより兵庫・須磨・垂水をへて舞子にいたるかのもしほたれけん。すまのうらわも、いとなつかしうみゆ。やどりのまへにあらたに停車場をまうけたり。よろづいとよくしなしてきよらなり。汽車をおりさせたまへば、御かちにてみやど」（五十九丁目裏）り河合宇兵衛のいへにいらせたまふ。五時四十分なり。こゝはおのれ、むかしよりしば〳〵ゆきかひてみなれつれど、このさとの松原は、ことゞころのものといひときはことにて、えもいはずをかし。今日はこの松かけに、くれなゐの提灯、数しらずつらねかけたるがきよらなる、しらずにうつろふさま、まことにこのものなく、をかし。日くれて、花火などありしかど、をりわるく、雨かせはげしく、よろづくちをし。こゝに須磨寺の宝物などもてきて、御覧せさす。波のひゞきもいとたかきにきゝなれたまはぬ。おほんたびねにうへのおほん舟路をさへ、おほしやらせたまふに、ささこそやすいもしたまは」（六十丁表）ざりけめ。

ゆめさめてみふねのうへをおもふかなまひこのはまのなみのさわぎに、といふ御歌をうけたまはりしこそ、いと〳〵かしこかりしか。夜ふけて、雨風やみたり。今日は山陽鉄道会社よりとて、みとものものへ酒・さかなおくりたり。酌とる女どもも、このわ

たりのものにはあらず。いとめづらし。ことにあすは汽車にて、たゝちに京都にかへらせたまふこゝろ、ゆるひにやいつくのやどりもいとにきはゝしありき。

廿五日、猶くもりたれど、空のけしき、いとのどかにて、あはぢしまもいとよくみゆ。わかき女房などは、濱におりたちて貝」（六十丁裏）石などひろふもみゆ。北島のないじ、

ほの〳〵とあけゆくそらにあはぢしまふちどりの影もみえけり、九時すぐるころ、宮にもこゝのせと口より濱のしらすにおりたゝせたまひ、海士のあみひくわざなど御覧す。おなじあみにもくさ〳〵の名つきたり。まづ鯛あみといふをひきて御覧せさす。いと興あり。吉野・多武峰など、みやまのたびのおほんめうつしには、いかにめづらしうもおもほしたまふらんかし。御まへ近くひきよせたるあみのうちに、おほきなるたこのつらふくらして、ゆるきいでたるも、いとをかし。鯛はいとおほくかゝりて、おほきなるは三尺に」（六十一丁表）もあまれり。あみのうちに魚のをどるさまも、今日はうれしげにこそみゆれ。とりあへず、やたてのふでして、

あまのこがおまへまぢかくひくあみにけふはもれたるうをやうらみむ、これを宮の大夫にみせつるを、御前にも御覧せさせしこそ、いと〳〵かしこけれ。朝のくもりも、やゝはれて海のおもてうるはしく、あはぢしま手にとるやうにて、みのさきの燈台など、ほのかにみゆ。海士どものあかき手ぬぐひを、かしらにまとひて、おのがじゝこゝろをやりてさへ、つりかはすらうかはしさも、ながくめづらしうや御覧すらんかし。まして若き女房のものこのみなるは、なみうち」（六十一丁裏）ぎはによりて、そゞろきあへり。さま〴〵のあみともひきをはりて、十時過るころ、もとのおましにかへらせたまふ。海士にも禄などたまはす。これは山陽鉄道会社より御覧せさせしよしにて、うをどもは生ながらに、京都へおくり奉りしとぞ、会社へもものたまひぬ。今日はさと人のねがひにて、しばらくこゝにとゞまらせたまひ、午後五時の汽車にて京都へかへらせたまふべきよし、さらにおほせいださる。午前十一時よりは、この前の山かたつけたるところに、近きころ、有栖川のみやの家のつくりたまへるにわたらせたまふとて、いでたゝせたまひ、ゆく〳〵道のほとりの松かねの松露がりをせ」（六十二丁表）させたまふ。かねてちひさきくまでのもとを、くれなゐの布などもて、まきたるをあまたまうけたり。宮人のかよわきたふさにもにけなからず、いとをかしげなるを、おのがじゝもちて、あなたこなたかきありく。宮もいと興せさせ給ひて、おほんみづからもくまでとりたまひて、ありかせたまふおほんありさま、近くさぶらふ人々も、めづらしきことにみたてまつるをまして、海士の子どもなどは、松の木かげにうちむれつゝをがみ奉る。こゝかしこにたちよらせたまふに、女房たちもおのがさすひにおもひいりて、ともすればみともにさへおくるゝを、鮫島陸軍中佐のいといかめしきいでたち」（六十二丁裏）にて、女房にかはりて、さゝやかなるみかさを、いとおもけにみうしろよりさゝげ奉りて、かしこまり行くさまの似けなきか、なか〳〵にやうかはりてをかしきみものなりけり。汽車の線路をこえて山路にかゝる。やがてみこの家なり。またかたなりに、かりそめなるものから処のさまよりはじめていとよし。こゝよりみれば、あはぢしまもたゞ庭わたりのこゝちす。濱松の梢をみおろせば、みどりのしきものをしきたるやうなるひま〳〵より、まさこちのいと白うみゆるに、なみうちよするけしき、詞にもつくしがたし。はるかに右のかたに明石の浦の洲先海の中に、さしいでたるにむら〳〵た」（六十三丁表）てる松の小松のやうにみゆるなど、更にいはんかたなし。昔より

名高きところなれと、ひらけゆくよにしたがひて、よろづたよりよくなれるにやあらん。家ともゝあまたみゆ。うち〳〵は外国人のもたる家ともおぼしときくぞ、すこし口をしき。みるがうちに松原のひまより、ひとすぢの烟のたちのぼるがみえて、汽車のはしりきたる、またさらにたぐひなきけしき也。こゝにてひるのおものたてまつる。みとものものへも、今朝えし魚どもを調せさせてみきたまふ。だれも〳〵いたく酔たり。これよりひとたびみとまりにかへらせたまひて、さらに五時二十分の汽車までたゝせたまふ。今日は天」（六十三丁裏）気もよく、松原のけしきもことにいみじ。早蕨のすけ、

みくるまのうちよりみればすまのうらの松原ごしに白波ぞたつ、大阪まではきのふのみちなり。梅田の停車場にて、祝砲・奏楽など、きのふのごとし。花火あり。今日はじめて、空もはれて日もくれたれば、はえありてみえき。これより京都までは、こたびははじめて御覧せらるゝ処なるに、くれはてたるはいと口をし。京都にかへらせたまへるは午後九時なり。御迎の人々、例のごとし。中上川山陽鉄道会社長も、御おくりつかうまつる。御所において、ことに謁をたまふことなく、つかせたまへるよろこび、宮の大夫に申して、皆もとのやど」（六十四丁表）りへかへる。十時過なり。

廿六日、天気よし。今日はかねてうへの京都にかへらせたまふべきさだめなりしを、このごろの海路のさはりにおくれたまひて、廿八日の午前に神戸につかせたまふことゝはきこえぬ。このほど雨のふりつゝきたるをり、京都にとゞまりたる緋桜のすけの、

おほきみのみふねのうちやいかならん都もはれぬ雨のこのごろ、とよめりとぞ。御まへをはじめ奉り、だれも〳〵ひと日をちよとまち奉る外、さらにことなし。

廿七日、天気よし。かねてみさだめの如く、午前九時より京都」（六十四丁裏）織物会社へわたらせたまふ。みとも例のごとし。もろ〳〵の器械のはたらきなど、のこるくまなく御覧したまふ。会社へそこばくをたまふ。それより女学校へいらせたまふ例ながら、都をとめのよそほひ、いとあではかなりき。こゝにも金をそこばくをたまふ。こゝにてひるのおもの奉り、それより二条離宮へわたらせたまふ。此離宮近きころ修理せられて、いときよらなり。しばらく御覧してたゝせたまふ。御所にかへらせたまふは午後五時過なり。けふ若菜のないじの月輪寺にゆきてしぐれのさくらのもとにて、

ときならぬしぐれのさくらみつえさしたちよるそで」（六十五丁表）につゆぞこぼるゝ、とよめりしは、をかしかりければ、つひでにしるしぬ。夜にいりて、又村雨たちたり。あすはうへのかへらせたまふべきに、おほんふなぢのほど、いかならんといとかしこし。

廿八日、くもる。いよ〳〵けふは午前十一時には京都へ還幸ましますべきよしにて、宮のうちもそのまうけともにて、いとにぎはゝし。おほんむかへにはみこたちをはじめ、例のかた〴〵停車場にいたらせたまふ。ほどなく汽車のつきて、御所へかへらせたまへるは十一時過なり。かりそめのおほんたびながら、はや十日ばかりにもならせたまへれば、めづら」（六十五丁裏）かなる御対面にて、御かたみに海山のおほんものがたり、聞えかはしたまふらん。たぐひなきゝはといへど、たびのうさはおなじことにて、よろづみこゝろにまかせぬことこそ、おほくおはしましけめ。かゝるおほんものがたり、ともをしたしくおほんかたむらにうけたまはる女房などこそ、又なくうらやましきものはあなれ。よろづのみものがたりのついでに、早蕨のすけ、

みゆきましなみぢのすゑのかぎりなく君がみいづやうちあふくらん、となんよめりしとぞ。

廿九日、くもる。ゆふつかたより雨ふりいでぬ。うちのおとゞ」（六十六丁表）より詠草おこせたまへるうちに、吉野行啓のことをおもひやり奉りてといふ歌に、

いかばかりうれしとおほせん吉水の花のなごりをきみにとはれて、とあり。おほん人がらことにあはれぞおぼえし。

三十日、くもる。なにごともなし。おのれこのほどより風のこゝちにてふしぬ。

五月一日、くもる。ゆふつかたより雨ふる。またことなし。

二日、きのふのごとし。

三日、雨ふることなし。」（六十六丁裏）

四日、きのふのごとし。

五日、よべより、雨なほやまず。今日は午後一時より、うへ宮もろともに京都をたゝせたまふべきさだめなれば、みともの人々はさらなり、おほんおくりの上下ひるごろより、ちまたに行かふほどに、俄にことやみぬとて、かへりくるものあり。こはいかなることにか、うへ宮のみこゝちそこなはせ給ふにやと、こゝろうごきたるにあらず。よべよりの雨にて、鉄道のそこなへるよしにて、そのすぢより奏しけるによりて、やみぬるなりといふに、まつこゝろ落ちぬよに、月はみえながら、なほ雲はれず。柳のないじ」（六十七丁表）

東山たかねはなるゝ月かけをひとよはみんとおもひしものを、げにひとよも、よくはれたる空のなかりしは口をし。だれも〳〵、かりのやどりにいとまごひなどして、あすは東京にかへらんといさみつゝ出たちたるか。又うちしをれて、もとのやどりにかへりゆく。うしろ手のいと不興げなるも、またをかし。

六日、はれたり。今日は鉄道のつくろひも、とゝのひたるよしにて、御いでたち、きのふの如し。きのふやみぬるに、さては今五・六日は、論なうたゆたふならんと、だれも〳〵、こゝろたゆみしつるを、いまたゞ今といふに、なか〳〵あわたゞしうに」（六十七丁裏）はかなるやうにて、更になごりをしきところ〴〵もおほかるべし。午後一時三十分に、うへ宮もろともにみかどいでさせたまふ。みとも例のごとし。二時の汽車にてたゝせたまふ。今日はきのふにひきかへて天気もよし。みおくりの人々のかほつきまで、こゝちよげなり。汽車のうちは、おなじみちなればしるさず。早蕨のすけ

みやこへといでたつけふもしかすかにかへりみらるゝふるさとのそら、とよまれしよし、後にうけたまはりて、ことわりになつかしうもおぼえき。近江路のあたりは、蓮花草の花盛にて、田のもは、さながらもうせんしきたるや」（六十八丁表）うなるに、学校の生徒などの、あぜづたひに並ゐたるは、ひゝなすゑたらんこゝちして、いとうつくし。名古屋につかせたまひしは、午後六時なり。御迎への人々、例のごとし。つかせたまひて後、雨いたうふりいでたり。かくては又、鉄道のそこなひもやと、いとこゝろもとなし。

七日、今朝はすこし小雨になりぬ。みさだめのごとく、七時にたゝせたまふ。汽車は三十分にいづ。みおくりのひと〴〵、例のごとし。雨中のけしきも、なか〳〵にをかしけれど、今日は東京にかへらんとて、だれも〳〵、こゝろそゞろきて、ものみる人もなし。早蕨のすけ」（六十九丁裏）

東路のふじのすそのをゆくけふもたかねはみえず雲ふかくして、とありしかとか。処々にみくるま迎へ奉るさと人、先のごとし。午後五時といふにことなく、新橋の停車場につかせたまふ。

おほんむかへには皇太后宮・皇太子をはじめ奉り、みこたち・おとゞ・つかさつかさの人々、いとおほかり。汽車をおりさせたまへば、侍従、剣璽をさゝげて、いつうるはしきみけしきにて、うへわたらせたまふ。つゞきて、皇太后宮には御うちきかすかたにて、猶いとわかうおはします。皇后宮・皇太子・みこたち、皆うちつれてわたらせたまふおほんありさま、めもあやにめでたしともめでたし。かくあまたの御ひかり」（七十丁表）をまのあたりにをがみ奉る身の宿世も、いとありがたくこそ。やがてみくるまをつらねてかへらせたまふ。祝砲・奏楽より道のほとり、軍人のありさま、すべて例のごとし。宮城につかせたまふは午後六時なりけり。柳のないじ、

ことなくてかへりきましゝうれしさに今日こそぬらせたびのころもを、誰もさここそおぼえしか。宮の太夫にかしまり申て、いへにかへりしは六時五十分なり。こたびのみともはためしなきことにて、いくつも処につけてしるすべきことも、いとおほかりしかど、みしかき筆のおよぶべくもあらぬに、病にさへさまたげられて、十日ほかりもうちふし」（六十八丁裏）ぬれば、よろづはかく〳〵しからずもらしがちなりしは、いと口をし。また御前わたりのことは、おのがしるべきかぎりならぬは、こは女房たちの筆にゆづりぬ。

明治廿三年五月

御歌所勤務宮内属　小　出　粲

つゝしみてしるす」（六十九丁表）

此日記、こたび活版にすべきよし、おほせごとあり。つきては、巻のうはぶみ、いかゞすべきと、御歌所長にはかりしに、なにかことゞ〳〵し。うゝた歌の詞などとりてもせよかしといはるゝに、ふとこの春の夢のこてふはいでましの花みくるまのあとやおふらん、といへる歌のをかしくおぼえしかば、こゝろのひくかたに、やがてみくるまのあとゝ名づけたるなり。さるはめぐみの波にうるぼへる轍魚のよろ」（七十丁表）こびを、いさゝかこゝにしるすになん。

粲